

Hermann Gottschewski

金曜日 5 限『協和音』

2009 年 11 月 06 日

協和音や不協和音の応用

1 ケルンのフランコの場合（先週の資料参照）

補足：協和音程の段階：ユニゾン・オクターヴ・五度・四度・短三度・長三度

協和音程や不協和音程の応用については具体的なルールはほとんど見られないが、原則的な考え方は声部を二声部目から順番に足して行くことで、協和と不協和は全体の和声からではなく、二つずつの声部の間に起こるとされる。その場合の原則は

「協和音程の直前に鳴らされた不完全不協和音は全てよく協和する」

「(二つの声部が) 協和音で進み、ときどき不協和音を混ぜる。後者の場合には二つの声部が逆の方向に動く (一方が上がれば他方が下がる)」

「*perfectio* の始まりには協和音程を使うべき」(*perfectio* は当時のリズム論の概念、おおよそ現代の音楽の *accented beat* に当たる)

「3 声部目を付ける時にはそれがすでにある一方の声部と不協和音を成した場合には他方の声部と今日和音を成さなければならない。」

「4 声部目、5 声部目などを作る時には、それが一つの既存の声部と不協和音程を成す場合には、外の声部とは協和音程を成さなければならない。」

「完全不協和音程を使ってはならない」

2 18 世紀の協和論の一例：Heinrich Christoph Koch (コッホ) の Versuch einer Anleitung zur Composition (作曲教則本)、1782 年、より

定義：協和音は聞いて心地よい (*angenehm*) もの、不協和音はそうでないもの

音程の分類：完全協和音程、不完全協和音程、不協和音程

完全一度、完全八度、完全五度は完全協和音程

長短三度、長短六度は不完全協和音程

「完全」と「不完全」と呼ばれる理由：一度、五度、八度は唯一な音程を指し、三度と六度には長短があるから。

不協和音程：1 減五度、増四度、2 増五度と原四度、3 減三度と増六度、4 増三度と減六度、5 全ての七度と二度

→純四度は協和の性質と不協和の性質を持っているので、どちらに入れるべきなのかは議論されている。コッホはそれについて一般的な判断を避けるが、応用によってその性質が決まる。

倍音列から三和音が発生し、(長短の) 三和音が「もっとも根本的な、もっとも優れている協和的な音の組み合わせ」である。